12の世界と異世界の管理人

桜音有里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１２の世界と異世界の管理人

【Ｎコード】
Ｎ８７３０Ｘ

【作者名】
桜音有里

【あらすじ】
軽い気持ちで受け持つことになった世界管理人。
俺はただ一度魔法を使ってみたかっただけなのに……。
アリエスの世界では勇者に仕立て上げられるは、レオの世界では武道大会に出場する羽目になるはでもう大変！
等身大の杖（ときどき剣？）を振り回しながら色々な世界を廻る主人公最強な、お話です。

1

みんなは、人は死んだらどこへ辿り着くと思う？
天国？地獄？霊界？
答えは、この中には存在しない。
何故ならば……

「ちょっとぉ～聞いてますかぁ～～」

そう。死んだらやたら白い空間に居たのだ。
そして、自称神（笑）に出会ったのだ……

「現実頭皮しないの～」

「漢字が違う！？」

頭いかれてるのか、コイツ。

「いかれてなんかないもん！」

うわぁ、人の心覗いたよ。

「すごいでしょ！」

「んで、此処はドコなんだ？」

俺は、自慢げな神（笑）を華麗にスルーし質問を投げかけてみた。

「うぅ……此処は私の空間なの……貴方にやってほしい事が有って

え……」

よっぽどスルーされたのが嫌だったのか涙声になっていた。
それにしても……

「やってほしい事ってなんだ？」

「全ての世界を管理してほしいの……」

「はぁぁぁっ！？……ゴホッゴホッ」

驚きからついむせてしまった。かなり苦しい。

「大丈夫……？」

「これが大丈夫にゴホッ見えたらお前ゴホッの目は飾りゴホッ物だぜ……」

やばい、なんかヒューヒュー言ってる。久々に喘息きたか？

「治癒“ヒール”」

瞬時俺の体を緑色の光が包み込んだ。

「あれっ、苦しく無い……？」

「今のは、治癒魔法って言うんだけれど……。」

魔法！？そんなのが有るのか！

「うん……まぁその説明はまた今度にしてさぁ……管理人、してくれる？」

どうしよう、と言うか魔法とか一度使ってみたかったんだよなぁ～。

「まぁ、いいさ。やってやるよ。」

軽い気持ちで答えてしまった。

これが俺のチートな旅の始まりだとは知らずに……。

1（後書き）

新連載！

モノ有り更新しないで始めちゃいましたｗｗｗ

2

「有難う！じゃあ転生後情報登録機使って姿，能力，添付才能決めてね～。」

フォォォォ……と音を立てて消えて行った……名前知らんわ。俺。

＞私の名前はカトレアだからねぇ……＜

ふむ、カトレアか。覚えたぞ。

そしてカトレアが去った後に残ったのは、ＤＳ○っぽいような小型機械。

恐らくコレが［転生後情報登録機］というやつなのだろう。

さっそくボタンを操作しようか。

ん？良く見ると端っこの方に残り１０００００Ｐとと書いてある。

ふぅむ、どうやら限界があるらしいな。

これは時間が掛かるぞ。と思いつつ、指を動かすのだった。

―――――――――３日後

「で、出来た……」

現在俺は、心身共に疲れ果てていた。

だか、そのかい有ってか転生後の俺は凄かった。

容姿は、勿論イケメンで能力は魔力無限、更に俺は生前拳銃と刀術を習っていて滅茶苦茶強い。

添付才能、これは取り敢えず凄過ぎるの一言に限った。例えば……。

“高身分制度”これは、生まれる両親が貴族（伯爵，公爵）か王族。という才能？だ。

“瞬間記憶”これは見た物を一瞬で覚える才能だ。

まぁ、それを含め約１５以上の添付才能が有ったのだが全て採用した。

途中、「Ｐ（ポイント）はまだまだ残ってるよ？」とカトレアに聞かれたので「魔法の才能にチートの８や９を……」といっておいた。

2（後書き）

次回は、世界設定です。

3（前書き）

明日と明後日お休みします！

3

＞うわっ！？こんなに能力付けるの？貴方、天才通り越して化け物よ？＜

開口一番にカトレアにこう言わせれた俺。……酷い。

＞ごっごめん、でも本気と書いてマジと読むぐらい凄いよ？＜

気にしたら終わりさ、きっと。

＞……ハァ、もういいよ。本当に貴方と居ると疲れるわね……＜

そりゃどーも。

＞褒めてないし！と、言うかそろそろ世界について説明したいんだけど？＜

あぁ、頼む。

＞（というか、この人何時の間にか念話覚えたの？！……もうヤダよ～）えっとね……＜

はい、割愛～

そして説明←

？この宇宙には地球の他に１２の世界が存在する。

？その１２つ世界を順々に転生して解れ（ほつれ）を解く（ほどく）

のが管理人の役目……らしい。
？ちなみに、１２つの世界には発展している物が有るんだとか。

アリエス→魔法
タウラス→文科系
ジェミニ→勉学
キャンサー→科学
レオ→剣
バルゴ→武術
リブラ→音楽
スコルピオ→芸術
サジタリアス→料理
カプリコーン→ファッション
アクエリアス→魔法と武術
ピスケス→本

更に地球は、この１２つの世界には含まれていないんだとか。
つまり、異なる世界「異世界」なんだと。これにはちょっと驚いた。

＞この場合、アクエリアスに転生するのが妥当だよね……＜

んにゃ、そろそろやっちまえｙｏ

＞……？じゃぁ面倒だしアクエリアスに転生させるねー。＜

すると、俺はいきなり出てきた穴らしき物に吸い込まれていった。

＞頑張ってねー、篠原菜花君……っと、吃驚させないでよ！……な……の？……えええええ！？いま行く、ちょっと待ってて！＜

プツン……

あの男が居た所には、一輪の星形菜の花が咲いていた……

3（後書き）

とりあえず、プロローグ終わった……

1

所変わってここは、アクエリアスのアストロロジカル王国。

――――――――――――――ここは、ドコだ？

気付けば俺は水？の中に浮いていた。多分お腹の中だろう。

それにしてもポカポカしてて気持ち良いなぁ……。

ズゴゴゴゴ…

するといきなり水が抜けて来た。

（ぇえ！？いきなり出産ですか！？速すぎだろぅ～）

「おんぎゃぁおんぎゃあ」

「王妃様、生まれましたよ！元気な男の子です！」

「まぁ、可愛いらしいこと…」

こうして、アストロロジカル王国第二王位継承者カロン？クルースン？ヴィ？アストロロジカが誕生したのだった。

2（前書き）

予約掲載のストックがぁ～（泣）

2

生まれた？瞬間、最初に見えたのはすっごく綺麗な女の人。
この人が俺の母親なのだろうか。

あれ？生まれた直後って、目見えないんじゃなかったっけ？

まぁ、いいや……。

「王妃様、殿下と陛下を呼んで来ますね！」

「えぇ。」

キィィーパタン…

「……カロン、貴方は……カイトの
支えになるのよ……。」

ん？お母さん（取り敢えず）俺に兄（多分）なんて居るのか？

「……カロン……」

それは、一瞬の出来事だった。
まるで、蝋燭の火が消える様に……。

ギィィー

「！……エレミオ、逝ったのか。」

え？え？え？え？滅茶苦茶でしょ！おいおいおい……。

＞あ、ちょっと天界の天使が手違いで殺しちゃったみたい。大丈夫だよ、この人魂凄く綺麗だったし、上手く輪廻転生の輪にはいれるよ？＜

そう……か。

＞ん……じゃーねー＜

俺が生まれてすぐ母エレミオは亡くなったのだつた。

2（後書き）

可笑しい！

なんでだー、暗過ぎるー

3（主人公能力説明付き）（前書き）

主人公が3歳になっています。

3（主人公能力説明付き）

あれから3年、俺は3歳になった。
どうやら昔から母上（便宜上の問題ｗ）は体が弱かったみたいだ。
家族構成だが兄上（便宜上の（（ｒｙ）が1人と父上（便（（ｒｙ）が居る。
2人とも母上が居ないことを気遣ってくれてかとても優しい。
さて、そんな中俺は、はっきり言って……凄いの一言に限る。
生まれた直後から大陸公共語が聞き取れていたし、普通に歩けてたし……隠すのが大変だったぜ……。
だって喋れれるのにあぅーとかばぶーとか言うんだぜ？……むちゃくちゃ恥ずかしかった／／／
まぁ、今は3歳だし大丈夫だけどな。

ここで俺の能力説明をしよう。

＞魔法編＜

“全通常魔法適性”……全ての通常魔法。火，水，風，土，治癒の適性可。

“全古代魔法適性”……全ての古代魔法。光，闇，創造の適性可。

“全神魔法適性”……全ての神魔法。時，宇宙移動，重力操作の適性可。

“魔力無限”……その名の通り魔力が無限。

＞体編＜

“イケ面ｗ”…転生後とても格好よくなる。

“剣及び武術最強”……１２の世界の中で最も優れた武術を使える。

“筋力、体力最強”→と似ていて筋力、体力が１２の世界で最も優れている。

＞特殊能力？編＜

“測定”……他人の能力を測れる。

“金銭無”……一日に一回莫大なお金が上から降ってくる。

“最高神の加護”……最高神カトレアの加護。

“不老不死”……名前通り。

まだあった気がするがこんなカンジだ。

4（前書き）

かかか、か乾燥が来ました……
カロン（以外カ）「いや、漢字違うし。」
おっ、カロン珍しいねぇ……
カ「オイ……」
感想を送ってくれて有難うです。
では、本編へどうぞ。

4

「カーローンー！」

ドタドタドタドタ　ガバッ

今抱きついて来たのは、カイト？クルースン？ヴィ？アストロロジカル。そう、俺の兄貴だ。

見た目麗しく、王家特有の炎髪灼眼（えんぱつしゃくがん……と言うと灼眼の〇ャナを思い出すな……）。しかも武術も嗜んで（？）いて騎士団の副団長を勤めている。……え？騎士団の副団長を勤めてるのに武術を嗜んでいる。とか可笑しいって？まぁ、兄曰わく「気にするな。」だそうで……。

「あにうえ、あつくるしいのではなれてくださいますか？」

うざったいので少し冷たく接する。すると……

「うぁぁぁぁん、スマン許してくれぇぇー。」

普段は、某鬼の副長並みに怖いと専ら（もっぱら）の噂なんだけれどなぁ……。

「はいはい、わかりましたよ。それで、ようけんはなんですか？」

これ以上いくととても面倒くさくなるので許す。

「あぁ……父上が呼んでいたんだ。……チッ何故（なにゆえ）にあやつに可愛

い、ｋａｗａｉｉカロンを……忌々しい……。（ボソッ」
こんなことを言っているのもしばしばだ。まったく、俺にどうしろと言うんだ。
「あにうえ、おちついてください。……ではちちうえのところにいってきます。」
「……あぁ。くれぐれも気を付けるんだぞ。」
「はい（ニコッ」
必殺エンジェルスマイル！
「ぐはぁっ……」
カイトに１２３４５６７８９０００００００のダメージ！
カイトは鼻血を吹き出しながら倒れた！
テッテテー
カロンノレベルガ上ッタ。
カロンハ笑顔ニナレバ兄ハ倒レルヲ覚エタ！
カロンノ防御ガ１９９０上ガッタ。
～国王室～
ガチャ
「しつれいします。ちちうえようけんとはなんでしょうか？」

「来たか、カロン。今日は魔力測定と魔法属性を調べ様と思ってな……。」

うっわ、最悪。魔力無限とかバレたらやばくね？

＞やっほ～ちわっす！みんなのアイドル、カトレアでぇーすっ＜

うざっ、きもっ

＞相も変わらずその毒舌っぷりは、なんとかならないの？＜

あぁ。取りあえずさっさと用件言え。

＞む～、魔力、魔法の隠蔽方法知りたくないですか？＜

さっさと教えろやヴォケ。

＞え～＜

……殴るよ？

＞メンゴ（はぁと）＜

……ゴゴゴゴゴ

＞ひぃぃぃぃぃ……ンンッ……隠蔽の方法は例えば魔力を隠蔽したいなら魔力隠蔽！とか三分の一だけだったら三分の一魔力隠蔽！で、魔法だったら火属性隠蔽！とかかなじゃ！＜

ブチッ

よしやってみるか！

魔力三分の一隠蔽！

魔法火，水，風，土，治癒，重力，光，時，属性隠蔽！

これで使える魔法は、闇、星、創造、だけとなった。

因みに、良くつかいそうなのは、

闇→“幻の闇”（まぼろしのやみ）相手のトラウマを呼び寄せる魔法。

星→“流星群”（りゅうせいぐん）空から隕石が相手に向かって降ってくる魔法。

“治癒星”自分や仲間の体力状態などを回復する魔法。

創造は……まぁイメージすれば出てくる魔法だし……。

だ。よーし！

「ちちうえ、ならはやくやりましょう。」

「あぁ。スピカ。」

「なんでしょうか？」

「魔力測定器と属性測定器を持って来い。」

「かしこまりました。少々お待ち下さい。」

パタン

今の人物はスピカ？クォーレット。父上（うえっ…）の専属メイドだ。実は父上と×××してるとか……。

まぁ、どうでもいいか。

「お待たせ致しました。」

目の前に置かれたのは、水晶×2。

「まずは、左の水晶に手を重ねてみよ。」

はい、と言って左の水晶に手を重ねる。

ゴォォォォ……

すると水晶は黒になった。

「なっ……凄いな、カロンは。宮殿魔術師と同格の魔力だ……」

まぁ、本当はもっと凄いけど。

「じゃあ次は右の水晶に手を置いてくれ。」

はい、と（ｒｙ

ゴォォォォ

水晶は、順番に黒、金色、黄緑となった。

「……闇と星と創造だと？古代魔法と神魔法(しんまほう)を……」

さらに驚ろかせるため、話かける。

「ちちうえ？どうしたんですか？ハーブティーでものみますか？」

フワッとカップに入ったハーブティーを創造し出す。

「しかももう使いこなしているときた。……まぁいいだろ。」

どうやら落ち着いた様だ。

「そういえば来週にある披露宴なのだが……」

あぁ、あれか。

「ちちうえがテキトーにそろえておいてください。では、しつれいしました。」

パタン……

「はぁ」

国王の溜め息は誰にも聞こえなかった……。

4（後書き）

どうでした？意外と長くしたつもりなんですけれど……。

5（前書き）

御免なさい……

はぁ、学生辞めたい…

5

「王子、いよいよ今日ですね。」

うぇ……やっぱり王子って言われると恥ずいな…。

え？今日が何の日だって？……俺のお披露パーティだよ。

「シィスラルド？クルースン？ヴァス？アストロロジカ国王並びにカイト？クルースン？ヴィ？アストロロジカ殿下、カロン？クルースン？ヴィ？アストロロジカ王子ご入来！」

あぁ、めんどくさ……。

入来したとたんに色々な貴族が近寄ってくる。……はぁ。

すると、兄貴が（会話では兄上、心では兄貴。）

「いい加減にしろ。カロンが困っている。それともお前等はカロン……第2王子を困らせるために来たのか？もしそうだったら……地獄に堕ちて一生苦しめ。」

おぉ、怖い怖い。貴族達が一斉に後ずさったよ。

「カロン。お前に逢わせたい奴がいる。着いて来てくれ。」

？逢わせたい奴？取り敢えずついて行って見るか。

親父（会話では父上、心では親父。）がいった所は４０代の男と俺（３歳）と同じぐらいの年齢の女の子。

「あぁ、ラルド久しいな。」

「……（ペコッ」

ラルドって言うのは親父の愛称（親しい人専用）だ。

ってことは3大貴族か。

「こいつが俺の親友、帝戸真紅（ていとしんく）だ。んで、息子のカロン」

「カロン？クルースン？ヴィ？アストロロジカです。よろしくおねがいします。帝戸さん。」

読者のみんなは、？と思っただろう。実は昔の英雄が日本人だったのだ。それでこの世界にも漢字……まぁ英雄の文字だから英文字と言われているが……が定着している。尤も全て覚えるのにはかなりの時間が
必要だが。勿論、林檎とか葡萄とか苺とかの食べ物系もある。……英雄様々だ。

「ほう、その歳で英文字を使うか。」

「お誉め頂き誠に嬉しい限りです。」

「か、カロン……お前いつ英文字を覚えたんだ？」

「昨晩です。本日のパーティーには、三大貴族の方が来るとメイドが言っていたので。」

そう、三大貴族は全員英文字の人なのだ。

「ところでそちらのお嬢さんは？」

「あ、あぁ……俺の娘の帝戸未来（ていとみらい）だ。」

「未来です。王子、宜しくお願いします。」

「カロン？クルースン？ヴィ？アストロロジカです……よろしくお願いします。……英文字を使った名前もあるけど聞きたいですか？」

「はい！（ニコッ」

ぐはっ……か、可愛い！

「篠原菜花だよ……。菜花って呼んで下さい。」

「はい、分かりました。菜花。」

「じゃあ、お近づきの印に……」

ポンッとあるお花を創造する。

「蒼い……薔薇？」

「蒼い薔薇の花言葉は奇跡とか有り得ない事。こんな奇跡な出会いの記念に。」

「は、はい……ありがとう、ございます……。」

「カロン、城に戻るぞ。」

「はい。」

「じゃあ、俺たちも帰るか。」

「えぇ。」

これが後に一緒に１２の世界を巡る、帝戸未来との出会いだった…

……。

1（前書き）

主人公は、６歳になっております。

1

あれから、3年と言う時が経った。

俺は、古代魔法が使えるためあのお披露目パーティー以来、ずっと王宮にいた。

暇過ぎて、国一番と言われている書庫の本を全て読破してしまった。

しかも、瞬間記憶があるため、内容も覚えてしまった。

そんなある日、親父が俺の元へとやって来た。

「カロン、」

『なんでしょうか、お父様。』

「お前は、書庫の本を全て読破したそうだな。」

『はい。』

「どうだ、学校に入る気はないか？」

学校？そういえば6歳は小学1年生だな。

「あの、帝戸未来も入学するそうだ。」

へぇー、でもそんな事を聞かないても俺の答えは決まっている。

『勿論、謹んでお受け致しましょう。』

「そうか、入学式は明後日だ。全寮制だから、準備しておけ。」

あ、明後日?!早っ。

『分かりました。』

こうして、カロンの学園生活が始まる……

1（後書き）

あ、明けましておめでとうございます♪（ ´▽｀）

何ヶ月ぶりの更新です。

遅れてすみませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8730x/

12の世界と異世界の管理人

2012年1月2日11時45分発行